

機関番号：14301

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008～2010

課題番号：20730411

研究課題名（和文） 適応・不適応の社会・文化的基盤

研究課題名（英文） Socio-cultural foundation of psychological adaptation

研究代表者

内田 由紀子 (UCHIDA YUKIKO)

京都大学・こころの未来研究センター・助教

研究者番号：60411831

研究成果の概要（和文）：現代日本社会において、若者の適応感や動機付けが低下していることが指摘されている。本研究では特にニート・ひきこもりの問題や、若者の感情経験、幸福感に焦点をあて、実験研究ならびに調査研究を行った。「相互協調的」とされる日本文化において、関係志向性が低く、対人関係における困難さを持つ若者が一定水準存在すること、また、個人の達成志向性が幸福感を低下させてしまう可能性などについて検討した。

研究成果の概要（英文）：

A growing percentage of the Japanese population are moving to the periphery of society because they are unable to secure a stable place of belonging within some institutional system. Some of them have withdrawn from participating in any kind of occupation. Such individuals do not show typical interdependent responses in social relationships or motivational processes compared with the average Japanese.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2008年度 | 1,600,000 | 480,000 | 2,080,000 |
| 2009年度 | 1,000,000 | 300,000 | 1,300,000 |
| 2010年度 | 700,000 | 210,000 | 910,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 3,300,000 | 990,000 | 4,290,000 |

研究分野：心理学

科研費の分科・細目：社会心理学

キーワード：適応感、不適応感、青年期、対人関係

1. 研究開始当初の背景

これまでの文化心理学の知見からは、日本文化は関係志向的、もしくは相互協調的 (Markus & Kitayama, 1991) であるとされてきた。

しかし一方で、近年、日本において対人関係の中での不適応感やコミュニケーションの欠如・不全が問題とされてきており、たとえ

ばひきこもりや対人不安、自己中心的な個人主義などの問題の顕現化が、様々な学問領域や実際の社会的場面で指摘されている。相互協調性が発現する形は全ての人に一樣ではない。するとひきこもりや対人関係の不全などは、文化的価値に対する一種の否定的反応であり、文化的価値を積極的に取り入れるこ

とは異なった意味で、やはり文化を反映したところの状態であると考えられる。

2. 研究の目的

「こころの不適應」については、個別事例的アプローチから検討されてきたことが多かったものの、文化や社会の視点からの検討は数少ない。そこで本研究では社会・文化的基盤により構築されるこころの適應・不適應を捉えるため、青年期の対人関係・自己に対する認知と感情、また、様々な価値観がどのように心理的な適應感をもたらしているかについての基礎研究を行い、心の健康と文化的適應に関連する諸分野への貢献を目指す。

3. 研究の方法

本研究では(1)自己の価値がどこにあると感じるかについての測定、(2)精神的、身体的な適應・不適應感、および動機づけのあり方との関連に注目した実証的研究を日米の大学生を対象として行った。調査対象として、大学生だけではなく、無職者や、ニート・ひきこもり支援を受けている若者からの協力を求めた。さらには発達心理学や臨床心理学など様々な関連領域の研究者との意見交換を行った。

4. 研究成果

(1) 青年期の社会的適應：ひきこもり・ニートの文化心理学的検討

ニート・ひきこもりは、実際に就労や教育の現場から離れている人々のカテゴリーとして扱われることが多いが、その心理的側面に関して言えば、現時点では教育、就労の中にいる人にもその「リスク要因」が存在すると考えられる。ニート・ひきこもり状態の要因となるような、またはニート・ひきこもり状態の結果として得られるような心理傾向を同定するような尺度の開発を試みた。

先行研究から多くのニート・ひきこもりに見られる共通の態度等をリストアップし、ニート・ひきこもりの「行動、心理状態」等に関連する定義やニート・ひきこもりになった原因の記述、さらには実施された調査の項目等から、53項目(逆転項目は21項目)のニート・ひきこもりの傾向尺度の予備項目を作成した。

調査方法：参加者は大阪府下のひきこもり支援2団体で支援を受けている20代~30代

の19名(ひきこもり期間1年以上)及び、京都大学に在籍する学生66名。調査参加者は、研究1で作成したニート・ひきこもり尺度、自尊心(Rosenberg, 1965)、相互独立的・相互協調的価値観尺度(Singelis, 1994)等について質問紙で回答した。

結果：ニート・ひきこもり尺度 最尤法による因子分析を行い固有値を検討したところ、3因子解が妥当であると判断された。第1因子には機会や仕事のポジションに関わらず、意識的に働かないことを選択しフリーターになる傾向を示す「フリーター生活志向」に関する項目(例：急いで仕事に就く必要はないと思う)が、第2因子には「自己効力感の低下」に関わる項目(例：社交性が低く、対人関係が苦手である)が、第3因子には「将来に対する不明瞭な目標」に関する項目(例：将来何をしたいのかよくわからない)が、それぞれ高い因子負荷量を持っていた。3つの下位尺度は、少なくとも3つの異なる種類のニート・ひきこもりを表していると考えられる。

結果：群の比較による検討 ひきこもり支援を受けている調査参加者は、学生に比較して全ての因子において得点が高く、尺度の妥当性が示唆された。

尺度間の相関は表1の通りであり、ニート・ひきこもり尺度の下位項目のそれぞれはRosenbergの自尊心尺度と負の相関を持っていた。さらに、フリーター生活志向性は相互協調性と負の相関を持っており、日本文化で優勢とされるような関係を断ち切ろうとする傾向にあることが示された。

表1 尺度間の相関

| | フリーター生活 | 低自己効力 | 目標不明瞭 |
|-------|---------|----------|----------|
| 低自己効力 | 0.35*** | | |
| 目標不明瞭 | 0.33** | 0.42*** | |
| 自尊心 | -0.29** | -0.78*** | -0.47*** |
| 相互独立 | 0.14 | -0.08 | -0.06 |
| 相互協調 | -0.32* | 0.02 | 0.12 |

(2) ニート・ひきこもり高リスク群における動機付けの検証実験

Heine et al., 2001による実験室実験のパラダイムを用いて、ひきこもりのリスクの高い人たちでの動機付けについて検証した。研

究1で作成したニート・ひきこもり尺度を大学生260名に実施した。その点数に応じて「高リスク群（上位10%）」「低リスク群（下位90%）」の群わけを行い、それぞれの群の人たちを対象に実験室研究への参加を呼びかけた。参加者は高リスク群23名、平均的～低リスク群84名であった（以下、低リスク群と記述する）。実験では課題（創造力テスト）を行い、それに対する成功（ポジティブ）もしくは失敗（ネガティブ）のフィードバックを与えた後に、実験者が必要なファイルを取りに行くのを待っている間に、実施は任意であるとして渡される類似の課題をどれぐらい継続して行うか、その時間を測定した。ワイヤレスのカメラで机の手元だけを撮影し、課題を行っているかどうかを15分を上限として（Heine et al., 2001では20分）別の部屋のモニターで観察し、測定した。最後に参加者にはディブリーフィングを行った。

結果、高リスク群の学生は失敗のフィードバックを与えると課題を継続する動機づけは低くなり、逆に成功のフィードバックを与えると、課題を継続する動機づけが高くなる特徴をもっていることを示した。対照的に、低リスク群の学生は失敗のフィードバックをもらった時の方が課題を継続的に行う動機づけが高まっていた。群×条件の交互作用は有意であった（ $F(1, 103) = 5.85, p < .02$ ）。また、Heine et al., 2001と今回の研究のデータを比較すると、高リスク群の学生の傾向はカナダ人学生の傾向と類似していた。失敗の経験は平均的な日本人の自己概念においては動機づけの要因となる傾向がある一方で、ニート・ひきこもりの人々においては逆に動機づけを低下させる要因となっていると考えられる。

ひきこもり・ニートは3つのタイプに区分できることが明らかになった。相互協調性を減じてフリーター生活志向のある「フリーター型」と、自尊心が低く失敗後にその動機づけを継続させることが難しい低自己効力感を持つ人たち（いわゆるひきこもり状態にある人たち）では異なる自己観を持っている可能性もある。また、高リスク群はこれまで日本文化で優勢とされてきたものとは異なる価値観や動機づけを持っており、これが高リスクの遠因となっているのか、それともその結果として表れてくるものなのかについて、今後の

検討が必要であろう。

（3）日米の青年期における自己価値、対人関係と幸福感

日本はアメリカと比較して、関係志向的であり、他者との関係性をより重視する文化であると言われている（e.g., Markus, & Kitayama, 1991）。しかし競争主義・成果主義の導入や社会的流動性の高まりなどによって、日本でも自己の成功や評価の獲得を重視するような個人主義的価値観が強調されるようになってきている。その中で、個人主義を導入しようとして過度に対人関係を排除しようとし、結果として幸福感を下げている可能性が指摘されている（北山, 2010）。また、コントロール感を重視するアメリカでは、自分でコントロールできない関係性に自尊心を関連付けてしまうと幸福感が下がる（Crocker et al., 2003）という報告もある。そこで、自己の価値を関係志向性と獲得志向性にどのように置いているのかによって、幸福感の程度が異なるかどうか、日本人学生とアメリカ人学生を比較することにより検討した。

京都大学生122名（男性66名、女性56名）、ウィスコンシン大学生62名（男性29名、女性33名）が自己価値随伴性尺度（内田, 2008）の改訂版を用いて、それぞれの領域にどの程度自己の価値を随伴させているのかを7件法（1：全くそう思わない - 7：強くそう思う）で回答した。自己価値随伴性尺度は、11領域（競争性、外見的魅力、関係性調和、他者からの評価、学業能力、家族からのサポート、同姓の友人からのサポート、物品所有、人の役に立っている感覚、異性からの人気、倫理的であること）、各5項目の計55項目であった。因子分析（最尤法・プロマックス回転）を行った結果、因子負荷が0.4を下回った「家族からのサポート」と「倫理的であること」を除き、内田（2008）が指摘するように、自己価値は獲得志向性・関係志向性に対応した二つの因子に分類された。「競争性」、「外見的魅力」、「学業能力」、「物品」、「異性」から構成される因子を「獲得志向」とし、「関係性調和」、「他者からの評価」、「同性の友人からのサポート」、「役立ち」から構成される因子を「関係志向」とした。それぞれの因子得点を「獲得志向性」、「関係志向性」と定義し、個人の自己達成と関係性を重視するそれぞれの価値観を説明する変数とした。

また、自分をとりまく人間関係について、A4 の用紙に 10 分間で記述してもらった。自分と、自分の友人は○で表して線で結んでもらい、その中で自分が一緒にいて居心地がよいと思える友人を指摘してもらい、その数を親しい友人の数とした。

最後に、人生満足度を測定する尺度 (5 項目; 項目例「だいたいにおいて私の人生は理想に近いものである」; Diener et al., 1985) と関係幸福感を測定する尺度 (32 項目; 項目例「今自分のいる環境や状況を受け入れている」; Hitokoto et al., 2009) に 7 件法 (1: 全くそう思わない - 7: 強くそう思う) で回答した。また、感情経験を測定する尺度 (快感情 11 項目: 幸せ・喜び・満足など; 不快感情 13 項目: 悲しみ・憂鬱・不安など; Brim et al., 2004) と身体的健康を測定する尺度 (11 項目: 頭痛・腰痛・食欲がないなど; Brim et al., 2004) を用いて、日頃どの程度頻繁に感じているかを 5 件法 (1: 全くない - 5: 非常によくある) で回答した。幸福感を多面的に捉えるために、人生満足感、関係幸福感、快感情経験、不快感情経験の逆転スコア、身体的健康を一因子とし、主成分分析を行った時の因子得点を「主観的幸福感」とした。

文化ごとに、獲得志向性と関係志向性を独立変数、主観的幸福感を従属変数とした重回帰分析を行った (表 2)。その結果、日本人学生においては、関係志向性は主観的幸福感を予測していなかった ($\beta = -.12, p = .27$) が、獲得志向性が高いほど主観的幸福感は低かった ($\beta = -.21, p < .05$)。一方、アメリカ人学生においては、獲得志向性は主観的幸福感を予測していなかった ($\beta = .06, p = .66$) が、関係志向性が高いほど主観的幸福感は低かった ($\beta = -.37, p < .01$)。

表 2 主観的幸福感を従属変数とした重回帰分析の結果

| | 日本人 | アメリカ人 |
|----------------|-------|--------|
| 獲得志向性 | -.21* | .06 |
| 関係志向性 | -.12 | -.37** |
| R ² | .09** | .13* |

* $p < .05$ ** $p < .01$

獲得志向性と関係志向性を独立変数、親しい友人数を従属変数として重回帰分析を行ったところ、日本人学生においては獲得志向性が高いほど親しい友人の数が少なく ($\beta = -.21, p < .06$)、関係志向性は親しい友人の数を予測していなかった ($\beta = .05, p = .65$)。一方、アメリカ人学生においては、獲得志向性・関係志向性ともに親しい友人の数を予測していなかった (獲得志向性: $\beta = -.10, p = .45$; 関係志向性: $\beta = -.02, p = .89$)。

これらの結果から、日本では獲得志向性が高いことが主観的幸福感を下げるが、アメリカでは関係志向性が高いことが主観的幸福感を下げていることが分かった。よって、社会で優勢な価値観と異なる価値観に自己価値を随伴させる状態が、幸福感を下げている可能性が示唆された。

また、日本人において、獲得志向性が高いほど親しい友人の数が少なく、その結果主観的幸福感が下がっていた。よって、獲得志向性が主観的幸福感を下げている要因のひとつとして、親しい友人の数が減少してしまい、結果として日本人の幸福感を支えるサポートの受け取り (Uchida et al., 2008) が減少してしまっている可能性が考えられる。

さらに、それぞれの文化的価値観に一致した自己価値随伴性を持つことが主観的幸福感を上昇させていないことも興味深い。Park & Crocker (2005) が指摘するように、特定の領域に自己価値を随伴させること自体が不安定さを招いてしまうことによる影響もあると考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 17 件)

① Norasakkunkit, V., Kitayama, S., & Uchida Y. (in press). Social anxiety and holistic cognition: Self-focused social anxiety in the United States and Other-focused social anxiety in Japan. *Journal of Cross-Cultural Psychology*. 査読有

② Uchida, Y. (in press). "A holistic view of happiness: Belief in the negative side of happiness is more prevalent in Japan than in the United States.," *Psychologia*,

③Miyamoto, Y., Uchida, Y., & Ellsworth, P. C. (2010). "Culture and mixed emotions: Co-occurrence of positive and negative emotions in Japan and the U.S.," *Emotion*, 10, 404-415. 査読有

④Uchida, Y., Townsend, S. S. M., Markus, H. R., & Bergsieker, H. B. (2009). Emotions as Within or Between People? Cultural Variation in Lay Theories of Emotion Expression and Inference. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 35, 1427-1439. 査読有

⑤Uchida, Y., & Kitayama, S. (2009). Happiness and unhappiness in east and west: Themes and variations. *Emotion*, 9, 441-456. 査読有

⑥内田由紀子 (2008) 文化と心の相互構成プロセス—文化心理学における文化概念と方法論 *文化人類学研究*, 9, 46-63. 査読無

⑦内田由紀子 (2008) . 日本文化における自己価値の随伴性—日本版自己価値の随伴性尺を用いた検証— *心理学研究*, 79, 3, 250-256. 査読有

⑧Uchida, Y., Kitayama, S., Mesquita, B., Reyes, J. A. S., & Morling, B (2008). Is Perceived emotional support beneficial? Well-being and health in independent and interdependent cultures. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 34, 741-754. 査読有

⑨内田由紀子 (2008). 文化と感情：比較文化的考察と組織論への意義 *組織科学*, 41, 48-55. 査読有

[学会発表] (計 17 件)

①Ogihara, Y., & Uchida, Y. (2011). "Effects of contingencies of self-worth on subjective well-being in Japan and the U.S.," *Cultural Psychology Preconference, The 12th Annual Meeting of the Society for Personality and Social*

Psychology, San Antonio, USA. 2011. 1. 27.

②Uchida, Y. (2011). "Are Japanese relationships still interdependent? Social support and motivation across cultures.," *Cultural Psychology Preconference, The 12th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology*, San Antonio, USA. 2011.1. 27.

③内田由紀子, Norasakkunkit, V. (2010). 「青年期の社会的適応：ひきこもり・ニートの文化心理学的検討」 *日本社会心理学会第51回大会 (広島大学) 2010. 9. 17. 口頭発表*

[図書] (計 6 件)

①内田由紀子 (2010). 文化と幸福感. 西村健監修、藤本修・白樫三四郎・高橋依子 (編) *メンタルヘルスへのアプローチ：臨床心理学、社会心理学、精神医学を融合して*, pp. 104-116. ナカニシヤ出版

②内田由紀子 (2009). 文化と心. 遠藤由美 (編) *社会心理学—社会で生きる人のいとなみを探る (いちばんはじめて読む心理学の本 2)*, pp. 161-180. ミネルヴァ書房

[その他]
ホームページ等

<http://kokoro.kyoto-u.ac.jp/jp/staff/uchida/index.html>

http://kokoro.kyoto-u.ac.jp/en/cultureko_net/

内閣府 幸福度に関する研究会 委員

6. 研究組織

(1) 研究代表者

内田 由紀子 (UCHIDA YUKIKO)
京都大学・こころの未来研究センター・助教
研究者番号：60411831

(2) 研究協力者

ノラサクンキット・ビナイ (NORASAKKUNKIT, VINAI) ミネソタ州立大学 准教授
宮本 百合 (MIYAMOTO YURI)
ウィスコンシン大学 助教